にゅうすレター News Letter 2008 9

研究会報告　*2008 年 6 月*

●物理数理学から保育の世界へ転身し、子どもの創造力に魅せられた浅野先生。子どもと関わる面白さ、保育の仕事の深さに改めて気づかされたお話でした。

「創造性とは何だろう」

～子どもたちから教えられること～

講師 ; 浅野功義 氏

プロフィール　宇都宮大学まなびの森保育園理事,用務員 06 年数理物理学教授を退職以来、保育士資格を目指し勉強中。数式を使い様々な現象を解析されてきた先生は現在、子どもたちの発想・創造する心に出会い、ふしぎの世界を歩き、感動の毎日を過ごされているそうです。

今回まずは私自身の話、まなびの森保育園設立の経過、用務員として子どもたちを観察する毎日から示唆される「創造過程:わたしたちはどのように創造するのか」についてお話します。

●子どもは創造的　子どもは感性的、好奇的、適応的という内発的欲求により行動をします。こころというものは生きる過程のなかで人の内発的欲求が変化・発展したものです。更にこころは感情・知識・価値観の３つの要素を含むということをご紹介しました。わたしは保育や教育で子どもたちの内発的欲求を育てることがもっとも大切だと考えています。

●自然物の柔軟性　次に園の実践をご紹介しながら自然環境と人工環境がこころに及ぼす影響について触れました。人工物ばかりを相手にしていると刺激がかたより、結果として感受性がかたよる･･･すると思考も単純になり、思考方法が機械的になり、想像力が弱くなる等、様々な局面で柔軟に対応できなくなるのではないかと私は経験的に考えています。

●創造性と保育の接点を考える　子どもの遊びや創作などの観察、また子どもたちとの日々の会話から①創造性は誰にもあり、②創造には知識や経験が必須ではなく、寧ろ③内発的欲求が大切である、ことがよくわかります。そうなると必然と「創造性は成長に従って消えるか」「創造行為において知識、経験はどんな役割を果たすか」「教育は創造性を伸ばせるか」という面白い疑問が次々と生じますね。

●創造のしくみ　実際「創造行為」を考える際は、自覚されたこころの働きだけではなく無意識を含めたこころの働き世界(範疇)も踏まえて考えなくてはなりません。講義の最後には「創造の変換ワークシート」を用い、日常的行為や意識された課題をこの世界の言葉「概念」でそれぞれを表現し、それらの概念がどのように変換され、再結合すると新しいものを生み出す「創造行為」に至るのか？について考えました。

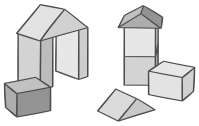
皆様、ご清聴ありがとうございました。

＜H20.6.10 於:杉並産業商工会館＞

会場からの質問&こたえ

●質問 1 「人工物ばかりで遊ぶと思考が単純になる」というお話、もう少しお聞かせください。

【浅野先生】人工物には目的があり、目的に適わない使い方をすると機能を果たさないという特徴があります。一方自然物はあらゆる刺激に耐え、反応するという点でとても豊かですね。だからこそ、子どもたちはより多くの自然物とのふれあいを通し、実感を持って体験を積み重ねることが大切だと考えています。勿論、人工物を使った遊びにおいては、壊れたときの対処法などに工夫を凝らすことができますよね。子どもたちと人工物を一緒に「直してみること」や「もっと壊してみること」などが有効かも知れません。



↓質問1・こたえのつづき

【汐見先生】　例えば、葉っぱ…紅葉の季節なら葉は赤く染まり、陽にかざせば葉脈が見え、千切ると匂いがする。自然物は様々な表情で「総合」「多元性」を示してくれます。すべてが関連し影響しあっている、それが「多様な認識」「柔軟な思考」につながります。

自然界に在るものはあらゆる意味で複雑です。教育でその複雑性を扱うことは困難ですから、部分を切り取り単純化した半人工物を教材とします。人工物はその点わかりやすい。それは舗装した道が道としての機能しか果たせなくなること似ていて、本来の無意味性・多様性が失われていきます。

そういう意味では、このことは子どもたちとの生活の中にわたしたちが考えるべきとても面白いテーマが含まれている、大切な提言だと言えるのではないでしょうか。

●質問2　テーブルを使って遊んでいる子に「これはテーブル」と知識を教えることで面白味が失われる気がします。創造性と関係する「がらくた」について、もうすこし詳しく知りたいです。

【浅野先生】 大人になって「創造性」が失われるようにみえるのは学びや知識が内発的欲求を妨げ、抑えてしまうからでしょう。「がらくた」は目的がない点がいいわけで、意味は子どもが創ります。「がらくたは役に立たない」という知識、感情、道徳や法律等の価値観や文化の影響が背景にあります。それらは社会生活にもちろん必要な訳ですが、子どもの世界は違いますね。その点「がらくた」は人工物の中ではいいと思います。

【汐見先生】 40 年前、子どもたちはゴミ捨て場で生き生きと遊んでいましたよね(*)。子どもの創造性を育む「がらくた」のある環境が失われて、現代の子どもたちの「創造性」がそがれつつあるのかもしれません。

*写真集「もうひとつの学校―ここに子どもの声がする」
宮原洋一　新評論 (2006/10)

●質問3 先生の視点は保育において貴重だと感じました。保育士がもっとこうすればいいのにと思うことなどありますか？

【浅野先生】 先ほど「宇宙人に会った」と言った子の話をしました。保育士は「嘘はダメ」との思いがあったようですが、「それで？」と続きを聞いたらよいと思いました。子どもの嘘はいいことだと思います。言うことを聞かない子もまず話を聞いてみる。これでは集団の調和にすぐには至りませんが個の欲求に応えられる。その子の「意味」は十人十色。だから子どもの嘘やわがままがあればまず話を聞く。必要なら‘ある意味で望ましい方向’に運ぶことを考えています。　文:I.M

柳田國男も「子どもの嘘はフィクションだから大事」と言っています。（汐見）

会場の感想 （6月研究会）

異なる分野から見た「保育」についてのお話から考え方の多様性を学ぶことができました。語り口はやさしいけれど、内容はとても高度でした。汐見先生のお話でさらに保育への提言として受け止めることの大切さに気づきました。

ありがとうございます。
保育環境の大切さを考えさせられるお話で、もっともっと詳しくお話が聞きたかったです。「まず子どもに聞く」を頭にいれながら保育をしていきたいと思いました。

必死で理解しようとしましたが、とても難しいお話でした。でも物理学に関する勉強をするのは学生時代以来なので、なんだかなつかしかった～。

数学的？で頭がついていかない所もありました。
しかしこういう考えを知る機会となり、とても良かったです。

創造性の原型を子どもは全部もっているなぁと思いました。不思議に思う心、工夫する心、絵を描き、物を作り、踊り、歌い、道具を使って音を出すこととか。
ヒトとヒトをつないでいく力。私たち大人に問われるのは子どもが本来持っている‘生きる力’をいかにスポイルしないか？なのかもしれないと感じました。

興味深いテーマでした。
具体例もあれば分かりやすかったように思いました。

今求められている「創造性」のお話を聞いていてワクワクしました。「創造性を育てることは可能か？」興味深いテーマです。子どもたちの創造性が失われていく気がする今、私達に何ができるのでしょうか？

研究会報告　*2008 年 7 月 NO. 1*

●20 代で単身ブラジルへ、そしてもう 9 年に・・・。研究会での報告も 3 度目。その度に活動の素晴らしさに感動、人として一回り大きくなっていく鈴木真由美さんに心からエールを送りたい・・そんな報告でした。

ブラジル・カノアの保育実践

～光のこどもたちの活動から～

話題提供：鈴木 真由美 氏

プロフィール ブラジル・カノアで「光の子どもたち」を主催。ブラジルの子どもたちに魅せられて、小さく貧しい漁村カノアに渡り、保育士として教育支援団の保育園を展開。これまで９年間、幼児教育に携わる。現在は２児の母として、子育て真っ最中です。

●カノアってどんなところ？

地球でいうと日本の裏側あたり。カノアの自宅から横浜の実家までは実に３６時間。カノア村は人口３００人ほどの漁村で、砂丘を隔て、海と森が広がる大自然に囲まれた土地です。村人は漁で生計を立て、１５年ほど前までは物々交換による流通が中心でしたが、観光地化により、生活体系が急変しています。言語はポルトガル語で、カノアの正式名称は　「Canoa Quebrada（カノア ケブラーダ）」（壊れたカヌー）の意です。

●なぜブラジルへ？

私が保育学生の頃、教育実習でいろいろな保育施設を経験し、目の輝きがなかったり、疲れている子どもの姿に気がかりを感じました。そして、他の国の子どもたちの姿もみてみたい！と、海外実習を考えるようになりました。友人はヨーロッパの有名な教育を学びに行っていましたけれど、私は誰も行きそうにないであろう場所を希望。サンパウロの留学生から「ブラジルに来てみない？」と誘いを受け、ブラジルのスラム街の保育園に受け入れてもらうことになりました。

スラム街を抜け保育園の門に入った瞬間、私の周りに子どもたちがたくさん集まってくれて・・・その子どもたちの目は輝き、彼らのダイナミックな遊びがそこに繰り広げられていました。実習を通し、**「ブラジルの子どもは栄養状態も学力も低いのに人間としての豊かさを感じる。それに対し日本の子どもたちは、生活が豊かなのになぜ…？」**という疑問が強く残り、ブラジルで保育をすることを真剣に考えるようになりました。

その後、ブラジルで保育をしたいなら、言葉の習得と２年間保育士経験をしてくること；その２つの条件をクリアすれば「ボランティアとして受け入れる」と言われて頑張りました。そして・・・遂にカノアで保育を始めることになったのです。

●　‘光の子どもたち’の必要性
・・そして保育園の起ち上げへ

まずはブラジルでの保育士仲間、エヴァさんと小さな家で子どもを預かることから始めました。

当時、村の近くにビーチ・リゾートができて、ティーンエイジャーが繁華街のきらびやかな生活や電化製品に憧れたり、売春や麻薬売買などの問題が出てくるようになりました。村人は今までの文化を守りたいけれど「私たちはこういう生活しかできない」とあきらめてしまい、母親たちもどうしたら良いか迷うばかり。子どもたちの将来に多くの人が危機感を抱いていました。

村人からその様な状況を聞き、私たちに出来るのは***「村の子どもたちが将来をきちんと選択し、生きる力を育てる保育園をつくること」***と考え、保育を始めることになりました。

あるＮＧＯ団体が園のために部屋を提供してくれ、市からは「規制なし」で運営を任され、遂に園が起ち上がりました。現在２歳から５歳の縦割り１クラスで１５名の子どもを預かっています。

●'光の子どもたち'の発展

カノアの子どもたちはもともと座って食事をする習慣がなかったため、就学後に教師に叱られ、次第に登校をしなくなる子の例が見られました。母親たちからは「どうしてくれる」と苦情が園に来るようになりました。そこで***子どもの育ちを長期的に見ていくことのできるプレ・エスコーラ***の運営を始めました。このプログラムでは、就学前の１年間を移行期間と位置づけ、公立小学校へスムーズに入っていけるようにする保育を取り入れました。

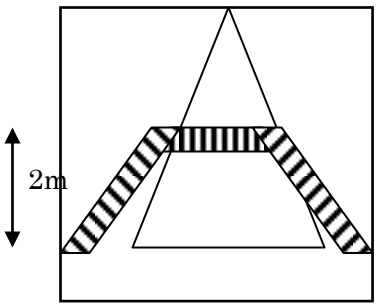
すぐに、卒園し就学した子どもたちが「学校での勉強は書き取りだけでつまらない…」訴えてくるようになりました。子どものニーズにも応えようと今度は１年生～３年生対象を対象として、**学童保育**を始めました。小学校は午前中で終わるので、午後から芸術にも触れられるような計画を取り入れました。また**地域の伝統を取り戻す活動**を保育に取り入れるため、村の老人を呼び歌を歌ってもらったり、伝統工芸に触れさせる機会を子どもたちに与えるなど、活動はますますの広がりを見せています。

●そして、新たなる課題へ…

ブラジルでは幼児教育という概念が確立されておらず、近年においても多くの保育園及び幼稚園では子どもに慣れた人々が集まり、近所の子どもを集めて保育をするということが一般的でした。2001 年より現在に至るまで教育に関する法律が毎年のように修正及び加筆されています。現在は先進国の教育水準に追いつこうと、義務教育が８年制から９年制へと変わり、プレ・エスコーラは今年から小学校の１年生となりました。

これからの課題としては、シュタイナー教育をベースとして「学びたい」プロセスを大切にしながら、世代・家庭・小学校とより密な連携をとっていくことが挙げられます。

●子どもを見守る大切さ



ある日ブラジルで生まれた長女が歩き始めたばかりの１歳半頃、高さ２メートル程もある木製の遊具までひとりで歩き、梯子状の階段を登り始めた時のことでした。

私は飛んで行き、娘を降ろそうとしましたが、一緒にいたお母さんに「待ちなさい、あの子は自分ができると思ったから登ったの。子どもの力を私たちが信じなければいけないでしょう？」と言われました。「あなたが彼女を抱えて帰ってくるのは簡単だけれど、ハラハラしながらでも見守るのが親としてあるべき姿じゃない？」と言われ、この人たちはすごいなぁ、と思ったのを今でも覚えています。***子どもが自分でできると思い、自ら試そうとする権利を大人が壊すことはできない***」と、この日このお母さんたちから学んだのです。

●子どもの挑戦や探求への尊重

大人は子どもへ押しつけてしまうことが多く、どうも子どもの力を信じなくなりがちです。しかし、***子どもを信じない大人に育てられた子は大人を信じる子になるでしょうか？***

子どもの思いをくみ取り、すこしの援助をすることは、その子の次のステップに繋がります。「あれダメ！これダメ！」とダメダメ発信の中で育つ子どもは、人とのコミュニケーションをとりにくい人となっていくでしょう。***思いを尊重されて育つ子は***、どんな状況や人間関係の中でも***自らの考えを持ち、模索しながら解決への努力をしていく***ことができるのではないでしょうか。

●むすび

小さな漁村カノアで人間のベースとなる幼児期の子どもたちと関わり、ひとりひとりの子どもがやがて小学生、中学生…***大人へと成長していく。彼らの未来を見つめることで、長期的な大きな目線で保育を考えることができるようになりました。幼児期の豊かさは、大人の考える豊かさとは遙かに違う豊かさを持っている***と実感させられました。

文:N.O,

会場からの質問＆こたえ

● 質問1 **現地で生まれた娘さんは二ヶ国語をどのように使い分けていますか？**

【こたえ】　娘は言葉をおぼえ始め言葉を発するのが楽しくなっていた頃日本に連れてきたとき、周りの人とコミュニケーションとれない現実に突き当たり苦しみを感じ元気がなくなり何も話さなくなりました。１ヶ月後、***彼女のなかで二カ国語が整理され、日本とブラジルが‘ひとつの世界’になりました。***そらからは、私がポルトガル語で娘に話しかけると「お母さん日本人なのになんで日本語はなさないの？」というニアンスで会話し、ブラジルのひとには、ポルトガル語で話すようになりました。

● 質問2 **カノアでボランティアの受け入れはしていますか？**

【こたえ】　日本から大学生のボランティアも来たことがあります。***現地法人の受け入れのシステムがあります***ので、行ってみたい方は連絡を下さい。旅は長いですがお待ちしていますよ。

● 質問3 **以前、カノアの家庭では立って食事を食べる習慣があると伺いました。真由美さんの園での教育により保護者がどのように代わったかを聞かせてください。**

【こたえ】　昔からのカノアの住宅では６畳一間に１０何人が住んでいて、家族が座って食事を食べるスペースがなく、立って食べる習慣がありました。保育園で座って、フォークや皿を使っての食事をしてきたら、保護者から「何故座ってたべるか？」「洗い物が多くなった」苦情がでました。住宅事情も変わり、座って食べられる環境ができ、***子どもたちもその方がいいという生活習慣を貫き、家庭の習慣が変わってきました。***

　また、ゴミを始末するという概念がなく“ごみのポイ捨て”もあたりまえでした。２０年前までカノアでは日用品が自然に還るものでした。文明の波が押し寄せてからは、プラスティック製品が出始めても“ポイ捨て”の習慣は続いていました。そこで、保育園では「ゴミ箱に捨てましょう！」というこたから始めました。

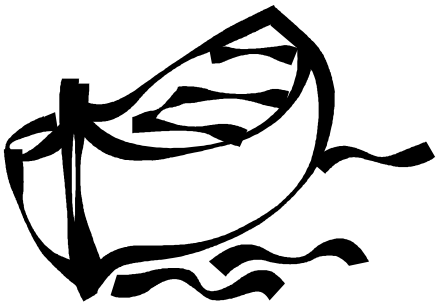
子どもたちは「ゴミはゴミ箱へ」の方が気持ちよいと思い生活の中で根付いていきました。例えば、親がアイスクリームの棒を道に捨てようとしたとき、子どもは「お家に帰ってから捨てるんだよね。」と声をかけ親も実行していくようになりました。

● 質問4　**ブラジルの子どもを受け入れたことがあり、言葉は通じないが歌遊びがきっかけで、生き生きした表情が見られました。他にも、ブラジルのサッカー選手は底抜けに明るくゲームプレイの展開の発想が豊かなのです。そのようなブラジル人の生き生きした国民性はどこからくるのでしょう？**

【こたえ】　ブラジルはもともと移民国家でいろいろな文化が混ざっています。子どもは小さな頃からいろいろあるのが当たり前で、「貧しくてもいつかは！」という***希望を捨てない***ことが豊かさに繋がっています。サッカーは国民的スポーツで皆大好きです。例えスラム街でボールが無くても新聞紙を丸めて蹴るものさえあれば、ゲームが成立します。

　ブラジル人は何でもすぐに匂いを嗅いだり、挨拶はハグするなど***生活文化の中に五感をつかいます。***小さい頃から五感を育て、常に生活の中で生かしています。それから、ブラジルにはテレビが無い家庭がほとんどですから、***想像力が育ち“夢を自由に創れる”***のです。日本は想像する力を育てづらい環境にありますね。子ども時代に想像力が育たないと夢を描きづらいのです。

文:N.O,



研究会報告　2008 年 7 月 NO. 2

和光保育園 見学会

～わこう村「和光保育園」を訪ねて～

話題提供 ; 木村歩美 氏

●行ってきました、わこう村「和光保育園」

昨年 7 月の研究会に於いて園長の鈴木眞廣先生から、子どもが主体的に遊び、生活をしていく環境を保育者・保護者・地域が一緒になって創り上げていくという和光保育園の取り組みについてお話を聞きしました。以来、「自分の目で和光を見てみたい、体験してみたい！」という希望がたくさん上がり･･･そして遂に今回、見学会の企画につながりました。

7 月 4 日の朝、東京は雨風の荒れた天気でしたが、現地に到着するころにはカラッと晴れ、鈴木先生と和光保育園の木造園舎が私たちを出迎えてくれました。メインの園舎は、旧園舎のイメージを大切にして設計されたもの(2002 年完成)で、深みがあるこげ茶色を基調とした落ち着いた雰囲気の建物です。

●居心地のよい園舎・お父さん手作りのプール

建て替えにあたっては、建物が子どもたちを緊張させることなく、落ち着ける空間となることを目指したそうで、初めて園を訪れたわたしたちの多くも、見学の時間中ずっと、なんとも言えない居心地のいい空気を味わうことができていたかなぁと思います。園舎前に広がる園庭には、常設の水遊び場の他に“夏限定”の手作りプールがあり、たくさんの子どもたちが遊んでいました。このプールのある場所は元々砂場だそうですが、毎年夏前になると、お父さんたちが砂をかき出してシートを敷き、砂場はプールに変身するそうです。そしてその砂は園庭に積まれて山となり、その山さえも子どもたちにとってはいい遊び場となっていました。

●子どもたち一人ひとりの時間を大切に・・

そして･･･和光保育園の特徴である、子どもたちが自分自身のペースを決められる生活、ゆるやかな時間の流れというものも実際に感じ、確かめることができました。お昼の決まった時間に昼食が始まるのではなく、先生の「ご飯だよ～」の声があるわけでもない。「おなかがすいた」（一通り遊んで満足した？）子から、ひとりまたひとりと･･･自らお昼の準備をして、食べ始めます。その横では、まだまだ遊んでいる子が遊びを中止させられことなく自由に、夢中で遊び続けます。そして、ご飯を食べ終わった子からまた順に遊びに戻っていく･･･そんな流れが、大人の大きな声かけもないなかで自然に進んでいきます。自分たちに任されているからでしょうか、話しかけてくる子どもの顔つきが、たくましく、しっかりとしているようにも感じられました。

●見学を終えて

見学会の最後には先生方にも参加していただき、ミーティングを行いました。私たちの感想や質問に丁寧に答えて下さり、汐見先生にも解説していただきました。

今回の見学では、子どもたちの姿や保育の様子を見たり、園長先生や職員の方とのお話を直接伺ったりすることを通して、和光保育園の特徴やすばらしいところをたくさん感じることができました。

特に、大人というひと環境創りの重要性…。「わこう村」の村民である大人同士（保育者間）がしっかりとコミュニケーションを取り、信頼関係を築いていこうとする。ここが基本。そして子どもたちは、同じ空間を生きる人間同士として認められ、当然のごとく生活が、遊びが保障される…。ひとが共に生きる環境こそ、保育環境創りの原点だと改めて感じさせられました。参加したメンバーそれぞれが、自分の保育を見直したり、あらたに創造したりするヒントをたくさん与えていただけた、そんな充実した１日でした。

最後に、わたしたちのために、貴重な時間を作ってお世話下さった鈴木眞廣園長をはじめ和光保育園の先生、職員の方や、私たちを幸せな気分にしてくれた子どもたちなど「わこう村」の皆さんに心より感謝いたします。

＜H20.7.8 於:杉並産業商工会館＞

文: Y.K.&H.A 写真:木村歩美氏

会場の感想（7月研究会）

子どもらしさがなくなる園が多くある中、***忘れていたもの・気づかなくてはいけないことをたくさん知らされました。***明日から自分に出来ることをはじめたいです。

真由美さんの活動を通して***「幼児の育ちに大切なこと」、「幼児期の豊かさとは何か」、「その子自身が尊重されること」「それを日々の生活・保育の中で実践するとはどういうことか」***などきちんと整理できている印象を受けました。今、日本の幼児教育はますます歪んでいます。***人が豊かに育つということ、それを育む保育について多く発信していただきたいです。***

実り多い時間でした！
和光の***'快い空間'と'まったりとした保育（子どもをせかさない）'は目からウロコでした。***ブラジルで真由美さんが、***希望をもって生きる子どもたちの姿から学ぶことの大切さ***を改めて感じました。現地の子育てのように***感性で育てることを忘れずにいたいです。***

1 歳半の娘さんが***自分で決めて２ｍの遊具に登った話が***とても心に強く残っていて、***常にそれを意識できるよう心がけています。***

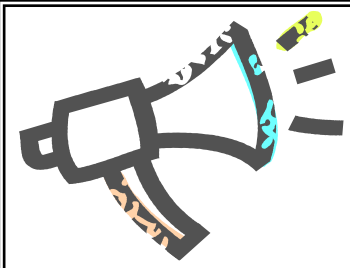
今日のお話を聞いて、世界の広さを感じました。***多様性の大切さ、「希望を捨てない」強さ、日本の社会に今最も必要なもの***のような気がしました。

拝金主義・商業主義がのさばり、***子どもの世界が巧み？に壊されている…「ここでこの流れを止めなければ」と思います。「子どもは、みんな同じ地球の子」***ということはその通り。おかしいのは大人でしょうか…？

面白かった！***子どもにとっての豊かさ***を、子どもと一緒に考えたいと思いました。

ブラジル…***二つの言語の間で最終的に「自分の言葉」を取り入れた娘さんの話は興味深かったです。***日本人の母のパーソナリティー、ブラジルの友人のパーソナリティーとつきあえるのはステキ。和光…泥だらけになる遊びを「自然」とか「田舎はよいでしょう？」と***押し付けられず、色々な遊びができると聞きホッとしました。子どもの好きに出来るっていいですね。***

和光で強調されているのは、***「生活感」***というキーワード。ブラジルでは、***保育と村人の生活が強く結び付いていると感じさせられました。***改めて保育実践における***「生活」概念の重要性を感じ、その意味を明確にしたい***と思いました。



わかって！！

若手保育者から発信し、みなさんと交流を深めるコーナーです

● 昨年 6 月の研究会で、若手保育者の提案により*“なんで？ダメダメ保育”*というテーマでフリートーキングが行われました。参加者との意見交流やグループ討議では、保育者同士で多くの悩みが共有され、また保育に対するエネルギーが満ちあふれ、大変有意義な時間となったのは記憶に新しいところです。

今回ニュースレターの発行に際し、誌面上でなにかこのような保育士が語り合える場を設けることはできないか…？、そんな想いから生まれたのがこの「わかって」のコーナーです。

◆「わかって」コーナーが目指す交流とは？

このコーナーは臨床保育・育児研究会に参加する若手保育者が中心となり、読者の皆さんとの交流を深めていくことを目的とします。このニュースレターの定例コーナーとして位置づけ、毎号**楽しく活発な意見交換の場を目指します**。

◆ どのように参加＆交流するの？

毎号、誌面上で「日々の保育での気付き、悩み etc.」をこの場から発信していきます。それら発信された思いに対し、ヒント、アドバイス、「わたしもこんなでしたよ」など共感の言葉や感想ほか…**皆さんの声を広く募集します**。寄せられた皆さんの声は、翌号誌面上でご紹介していきます。

投稿は**2通りの方法で受付します**（詳細は右記をご覧ください）。皆さまの**積極的なご参加を…心よりお待ちしています**！

■今回のテーマ■

リフレッシュ法を教えてくださーい！

“あぁ、失敗しちゃった…”“気負いすぎて空回り。”経験がまだまだ少ないわたし達は日々反省したり、落ち込むことがたくさんあります。しかも翌日の保育に影響してしまうことも。「私は大好きな〇〇をして元気になるよ！」など、オススメの気持ちの切り替え方、リフレッシュ法を教えて下さい。（YK さんより）

■投稿はこちらへ■

上記の呼びかけにお答え頂ける方は、研究会当日に配布されるアンケート、または Email アドレス⇒ info@ikuji-hoiku.net 迄ご意見をお寄せください。

■ 気づき＆悩みも募集します■

「わかって」コーナーでは同時にこのコーナーで取り上げてほしいテーマも募集します。皆さんの日頃の思い…どしどしお寄せください。お待ちしています。

● はじめまして。「わかってコーナー」を担当します。どうぞよろしくお願いします ●

保育士 4 年目の YY です。研究会に参加し、沢山の気づきをもらい保育園で感じていた違和感が解消され、“真の保育とは？”と考えるようになりました。活発な意見交流をしていきたいです。

保育士 4 年目の MY です。研究会では、様々なジャンルの職業から見た保育を学ぶことが出来、悩みや疑問を共有しリフレッシュすることができ、良い勉強になります。よろしくお願いします。

保育士 4 年目の YK です。研究会に参加し、自分の保育を振り返り“保育って楽しい！”と思える大切な会になりました。初参加以来 1 年半楽しい＆嬉しい場面がどんどん増えてきました。宜しくお願いします。

保育士試験、合格したての IM です。今は要保護児童の家庭支援の仕事をしています。研究会では「こどもの育ちに必要なこと」を考え参加しています。宜しくお願い致します。

編集後記

ようやく臨床育児・保育研究会の「にゅーすレター」が発行されます。本来、この欄は、編集にあたったスタッフが書くものですが、今回だけは、発行人の汐見が書いています。編集スタッフのみなさん、本当にご苦労様でした。ここまで来るのはたいへんでしたね。今は定例研究会の報告と討論の記録が中心ですが、少しずつ、会のメンバーの実践の記録や、普段思っていることや考えていることを自由なタッチで書いて、みんなで意見交換する媒体になっていってくれるといいなと思っています。臨床というのは、実践の現場から離れないで考えていこう、という意味です。その、現場にいる人間の、自由な現場感覚の発信と意見交換の場、これがこの「にゅーすレター」です。ということで、みなさん、どんどん投稿を！！！！！特に若手は優先します。

臨床育児・保育研究会 ニュースレター Vol.1　◇発行日…2008 年 9 月 9 日
◇発行…臨床育児・保育研究会　◇発行人…汐見 稔幸　◇事務局…info@ikuji-hoiku.net
◇編集スタッフ…　・青柳 秀雄　・石田 由紀子　・小野村 菜穂子　・小林 淑恵　・徳永 洋子
・松永静子　・ 森 郁子　・山川洋輔　・山下 雅弘